

## 5. 3年保育5歳児N児

中野 淳子

N児は、自分の思いを素直に表出し、教師に言われたことやみんなの約束をきちんと守ろうとする。しかし、相手の気持ちや周りの幼児らの気持ちに気がつかないまま自分の思いを通そうとする姿が見られた。

また、相手の気持ちや場の状況をあまり意識せずに友達遊びに入ろうとすることが多く、周囲の幼児らに驚かれ、遊びに入れてもらえないなどのトラブルが度々起こっていた。

そこで、N児には、周りの幼児の思いに気づいて、その思いを受け止められるようになってほしいと願い、N児の姿を追っていきたいと考えた。

### 事例1 「そこに牛乳おかないで」

4月11日(火)

牛乳タイムの出来事である。みんなが手に牛乳を持ち、「いただきます」をしようとしたときだった。突然、N児が大きな声でF児に怒り出した。F児が欠席の幼児の椅子に牛乳を置いているのを見つけたのである。年中組のときに牛乳を椅子の上に置かないという約束があった。

N児 「そこに牛乳おかないで」

F児 「少しくらいいいでしょ」

N児 「ダメだよ。そこは、W児くんの場所なんだから」

F児 「でもないんだから少しくらい置いたっていいでしょ」

F児が話を聞いてくれないと感じたN児は立ち上がり、黙って牛乳をF児に持たせ、W児の椅子をサークルから外そうとした。F児も椅子を元に戻そうとしてトラブルになった。突然のことに隣に座っていたY児はびっくりしている。周りの幼児らも驚くばかりで止めに入ることができなさそうだったので、教師は話を聞くことにした。

教師 「F児ちゃん、N児ちゃんどうしたの」

F児 「N児ちゃんがW児くんの椅子を後ろにやろうとするの」

N児 「だってF児ちゃんが牛乳を椅子の上に置くの」

F児 「お休みなんだから少しくらい置いたっていいでしょ」

N児 「だめ！そんなのF児ちゃんだけずるいの」

F児 「ずるくないもん。少し置いただけでしょ」

N児 「ここはテーブルじゃないの」

N児の言うことが正しいことに気づいたF児は牛乳をエプロンのポケットにしまった。周りの幼児らは呆気にとられている。これで落ち着くかと思ったその瞬間、N児はまたW児の椅子をサークルから外そうとした。それを見てF児も声を荒げた。

F児 「なんで、後ろに持っていくの」

N児 「また置くかもしれないでしょ」

F児 「……。置かないって」

また二人で椅子の取り合いになった。二人では落ち着きそうになかったので二人を席に着かせて他の幼児らに話を聞くことにした。

教師 「N児ちゃん、F児ちゃん、二人がなぜけんかしてるのかみんなにお話してくれる？」

N児 「F児ちゃんがW児くんの椅子に牛乳をのせたの」

F児 「今はしてない」

N児 「またするかもしれない」

教師 「だから、N児ちゃんは椅子を後ろにどかそうとしたの？」

N児 「そう、片づけておけば、F児ちゃんは置けないでしょ」

教師 「困ったねえ」

H児 「椅子を片づけたらW児くんかわいそう」

X児 「そうや。W児くんおうちの用事で東京行っとるんやし、帰ってきたときに椅子無かったらがっかりする」

みんなが椅子を片づけることに反対したので、N児はまた怒り出した。

N児 「でも、またF児ちゃんが置くかもしれないでしょ」

F児 「F児、もう置かない」

N児 「でも置くかもしれないでしょ」

N児はなかなか引き下がらない。痺れをきらしたm児が言った。

m児 「置いたら、口で注意すればいいでしょ」

N児 「だってF児ちゃん口で言ったって聞かないもん」

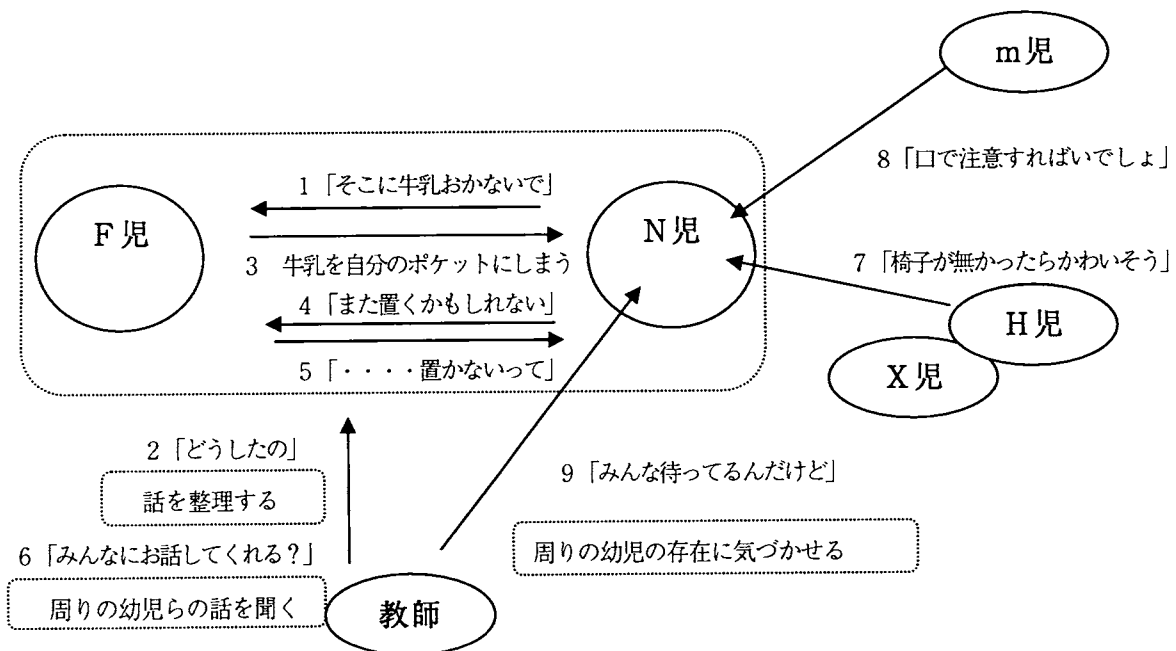
F児 「聞くよ」

F児は反省して牛乳をポケットに入れているのに、N児はずっと言い張っていた。教師はN児に周りの幼児らの気持ちに気づいて欲しいと思ったので、話を整理することにした。

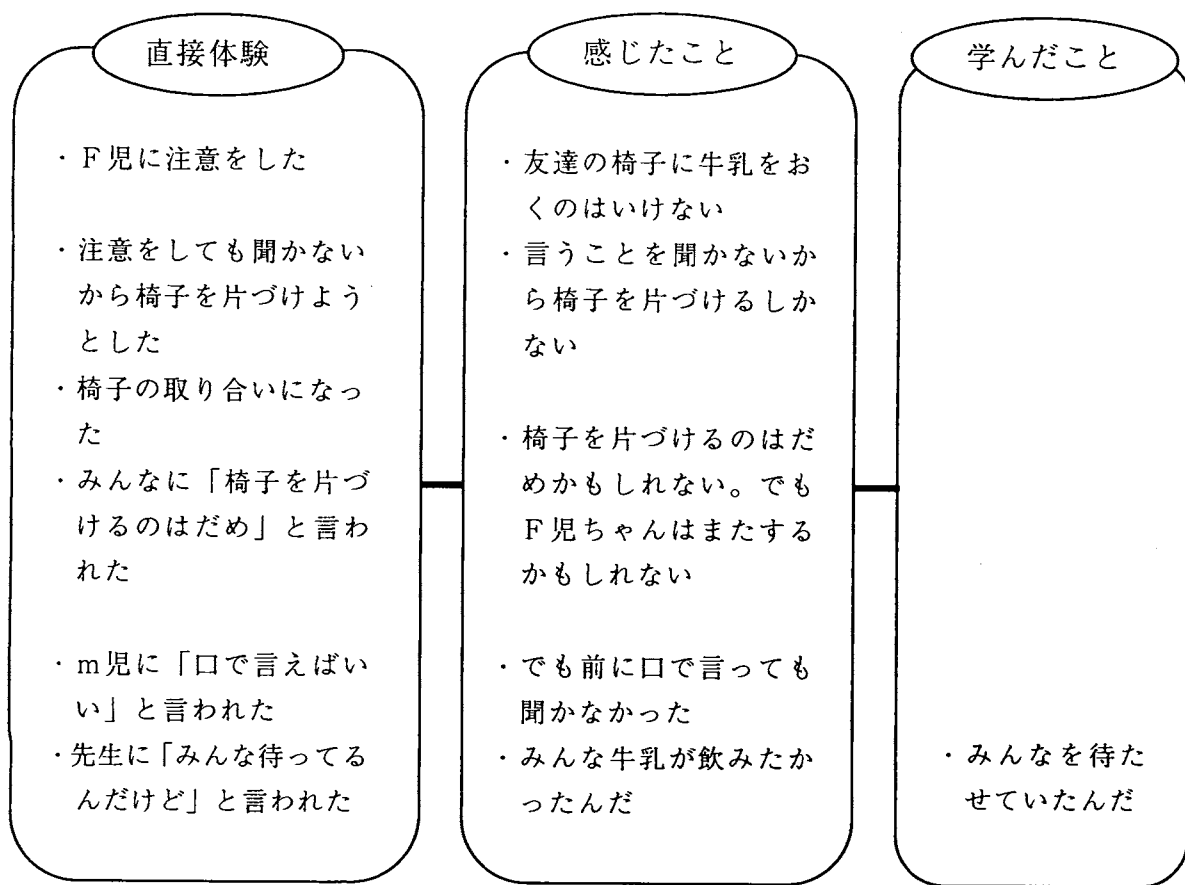
教師 「F児ちゃん、今度から牛乳を置かないんだよね。」  
 F児 「うん」  
 教師 「N児ちゃん。F児ちゃんは今度から牛乳を置かないんだって。」  
 N児 「でもまた・・・」  
 教師 「N児ちゃん。みんな牛乳を飲みたくてずっと待ってるんだけど。」  
 N児 「・・・・・・・・」  
 教師 「もういただきますをしていい？」  
 N児 「・・・いいよ」

周りの様子を見て、N児は頷き、みんなで「いただきます」をした。

<かかわり>



○社会的側面の学びの様相



○N児の育ちについて

N児は、クラスでの約束やルールをきちんと守ろうとしている。F児が年中組のときからの約束を破っているのも許せなかったのだろう。しかし、N児はF児がN児の言葉を受けて牛乳をポケットにしまったにもかかわらず椅子をどけたり、みんなが牛乳を飲むのを待っているにもかかわらず自分の思いが通るまで譲ろうとしなかったりした。相手の行動の変化や周りの幼児らの気持ちに気がつかないまま自己主張を通そうとするところがN児の課題であろう。そんなN児もサークルになっている友達からの言葉や教師の「みんな待ってるんだけど」の言葉で、はじめて黙りこんで考えた。納得はできなかったに違いないが気持ちを切り替えた姿から、自分を待っているクラスみんなの存在にN児が気づいたことがわかる。

○環境の構成について

牛乳タイムはサークル状に座っている。そのため、F児がW児の椅子に牛乳を乗せていることが見え、今回のトラブルになった。そして、周囲の幼児からも二人のトラブルがよく見え、H児、X児、m児らが二人のトラブルについて思いを発することになった。また、サークル状になっていたからこそ、N児もクラスみんなが待っていることに気づくこと

ができた。サークル状の席は、クラスのみんなの様子が見え、集を意識するうえで非常に大切な場と言える。

#### ○教師や友達のかかわりについて

N児がずっと自己主張せざるを得なかったのは、新しいクラスになってルールを守って頑張ろうとしているN児の気持ちを受け止めなかったことが原因だと思われる。ルールを守ることを通して、N児は新しいクラスでの安心感を得たいと思っていたのかもしれない。5歳児といえどもはじめは不安でいっぱいだという認識が不足していたかかわりであった。

また、N児はF児が牛乳をポケットにしまったにもかかわらず、過去のことを引っ張り出して自分の思いを通そうとした。F児が反省している気持ちがわからなかったのだろう。相手の思いをくみとるのが苦手なN児には、F児の思いを代弁して伝えてあげることが必要だった。

N児がF児や周りの幼児に責められて引っ込みがつかなくなってしまったところで、N児に周りの幼児の気持ちに気づくように「みんな待っているんだけど」と声をかけた。そこでN児は初めて言い返すのをやめて、気持ちを切り替えることができた。正しいと信じて主張を始めると周りが見えなくなってしまうN児には、視野を広げ友達の思いに気づかせる声かけは大切であった。

#### ○今後に向けて

N児はみんなのルールを守ろうと頑張っている。しかし周りの幼児らの気持ちに気づくことができないために友達とすれ違ってしまいトラブルになる。今後は、周りの幼児の気持ちを代弁したり、言葉を補ったりして、N児が周りの幼児の気持ちに気づいていけるように援助していきたい。

#### 事例2 「あとから貸してね」

5月19日（金）

したい遊びの時間、N児が色水をつくったあと何をしようかと周りの様子をうかがっていたときのことである。N児の側をF児が虫網を持って通り過ぎた。それを見たN児がF児に近寄って声をかけた。

N児 「網、貸して」

F児 「だーめ」

N児 「どうしてだめなの？」

F児 「まだ捕まえてないの」

N児 「でも、自分ばかり使ってるのだめだよ」

F児 「さっき、t君に貸してもらったんだよ」

N児 「でも、もう使ったでしょ。N児は1回も使ってない」

F児 「でも、まだ捕まえてないの」

教師はしばらく二人の様子を見守ったが、貸してもらうのが当然というN児の様子が気になり、間に入ることにした。

教師 「N児ちゃん、F児ちゃん大きな声でどうしたの」  
N児 「F児ちゃんが、網を貸してくれないの」  
F児 「だって、F児、さっきt君に貸してもらったところなんだよ」  
教師 「先生も見てたけど、F児ちゃんは、ついさっき、t君に貸してもらってたね。F児ちゃんもt君が終わるまで待ってたの？」  
F児 「そう、F児だって待ってたんだよ」  
N児 「でもN児使いたいの」  
F児 「あとから、貸してあげるからー」  
N児 「……」  
教師 「N児ちゃん、F児ちゃんはまだまだあまり使っていないんだよ。それにF児ちゃんは使ったら貸してくれるって言うてるよ」  
N児 「……………。あとから貸してね」  
F児 「うん」

F児は虫網を持ってチョウを捕まえに行った。N児は渋々といった表情で教師と赤土山で泥団子をつくりながら待っていた。

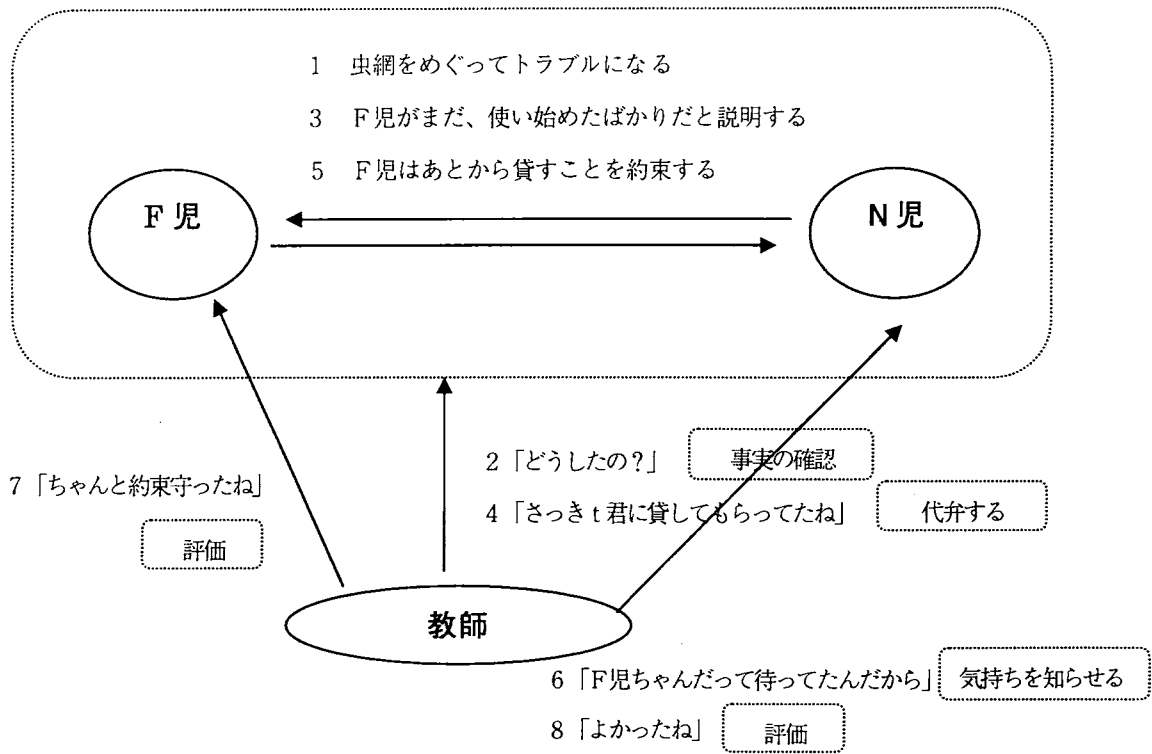
教師 「いきなり、貸してって言うても無理なこともあるんだよ。F児ちゃんだって待ってたんだから」  
N児 「うん」

10分ほどすると、F児が網をもってきた。

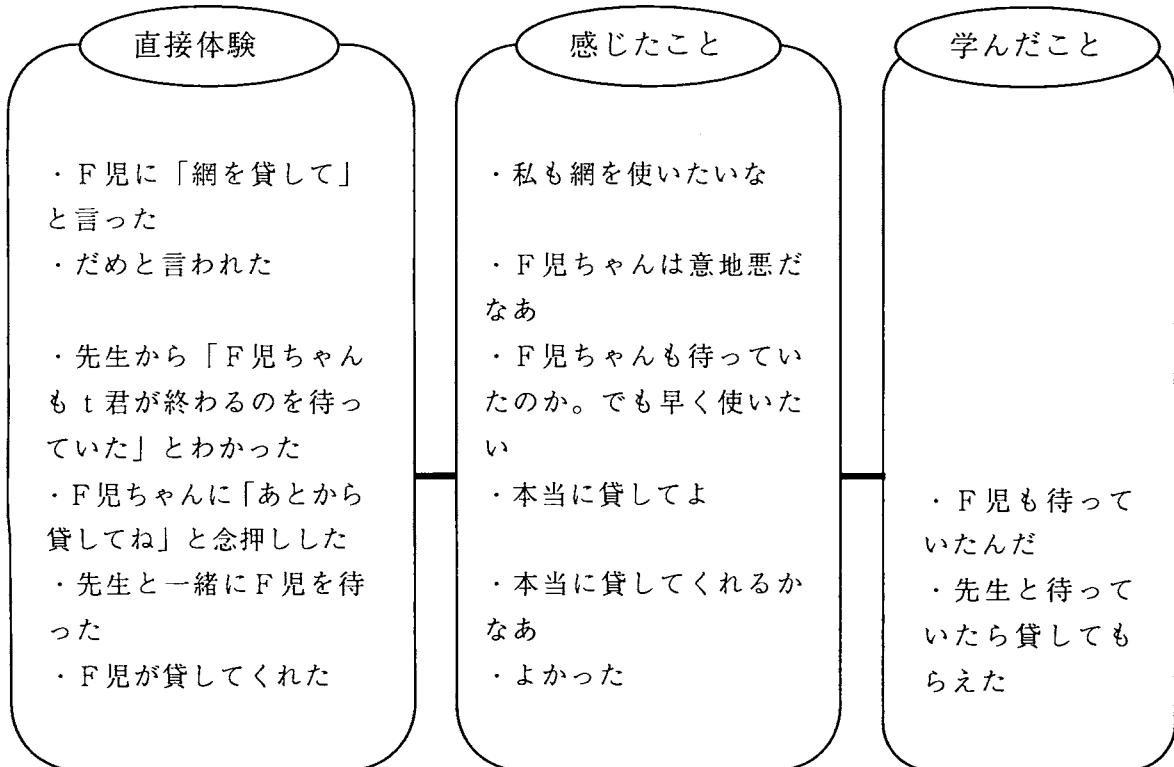
F児 「はい、網」  
N児 「ありがと」  
教師 「F児ちゃん、N児ちゃんとの約束ちゃんと守ったね」  
F児 「うん」  
教師 「N児ちゃん、よかったね」  
N児 「うん」

N児は嬉しそうに網を持って築山の方へ走っていった。

<かかわり>



○社会的な側面の学びの様相



### ○N児の育ちについて

N児はこの日だけでなく、ものや場をめぐって友だちとトラブルになることがあった。その多くの場合は、N児が場の雰囲気を読めず、声をかけて欲しくないときにかけたり、自分の思いつきで行動してしまったりしたときであるように思われた。本事例でも、網を貸してもらったばかりのF児の気持ちも考えずに要求し続ける姿が見られた。しかし、F児もt児を待っていたことを知ったり、F児が約束を守ってくれたりしたことで相手の気持ちを考えるきっかけになったのではないかと考える。

### ○環境の構成について

虫網の数は3本に限定してある。3本にすることで替わり合って使ったり、一緒に使ったりできると考えるからである。いつも3本の虫網が用意されており、いつも使っている幼児らの中には一匹捕まえたら交替、ある程度の時間使ったら交替という暗黙の了解がある。しかし、この暗黙の了解にN児が気づかないことがトラブルの原因になったと考える。

F児が虫を捕まえている間、教師はN児と赤土山で待っていた。場所を変えてN児を冷静にさせて考える場をつくったことで、N児は気持ちを切り替えることができたと思われる。

### ○教師のかかわりについて

話を聞いていると二人の気持ちにはずれがあった。F児はt児との約束を守ったうえでこれから虫を捕まえようと意気込んでいた。しかし、N児はF児の気持ちには関係なく「貸して」と言ったら相手がどんな状況であっても貸すのが正しいと思っているようであった。

そこで、F児もちゃんと待っていたことやF児がt児との約束を守ってついさっき貸してもらったことなどをN児に対して代弁した。それでも納得できないN児に対して、F児が「あとから貸す」と言っていることも念押しした。その結果、N児は教師と一緒に待ち、F児も約束通りN児に虫網を貸すことにつながったと思われる。そこで、教師は約束を守ったF児と待つことができたN児を評価する言葉をかけた。

待っていれば貸してもらえたという経験にはなったが、F児の気持ちを思いやるという経験にはつながらなかった。

### ○今後に向けて

N児は本事例以外でも、相手の気持ちや状況を考えずに、こうあるべきだというN児の思いで行動するためにトラブルになることが多々ある。今後は、相手の状況や気持ちを考えさせる援助を行い、どのようにかかわったらいいのかがわからないときには、具体的にN児に提案していきたい。また、周囲の幼児にもどうしたらよいのかを一緒に考えさせ、N児の行動の選択肢を広げていきたい。



朝の集いを始めようとしたときのことである。H児はオレンジグループの表に当番カードをかけようとした。それを見て、N児がH児を制してトラブルになった。

- N児 「今日の牛乳当番は水色だよ。」  
H児 「オレンジしてないよ」  
N児 「オレンジはしたよ」  
H児 「オレンジはしてない」  
N児 「H児ちゃん覚えてないんだよ」

二人では話がつかないようだったので、周りの幼児の力を借りようと思い、周りの幼児にも聞こえるように声をかけた。

- 教師 「ううん？どっちやったっけ。金曜日のことだから先生も忘れちゃったよ。」  
Y児 「オレンジしたよ。なあ」

そう言って、Y児は同じオレンジグループのM児に同意を求めた。

- M児 「そうや。金曜日したよ」

それを聞くと、N児は何も言わずにH児の持っていた星のカードをいきなり取り上げた。取り上げられたH児は泣き出した。N児はH児が泣き出したことを気にも留めず、水色の当番表のところに星のカードをかけた。その様子を見て、Y児はN児をとがめた。

- Y児 「N児ちゃんだめやよ」  
N児 「だって今日、水色やよ」  
Y児 「いくら水色でも、勝手にとったらだめやよ」

N児は黙ってしまった。その横でまだH児は泣いている。

- 教師 「H児ちゃんは、なんで泣いてるの」

H児が泣いて言葉にならないのを見ると、代わりにY児が答えた。

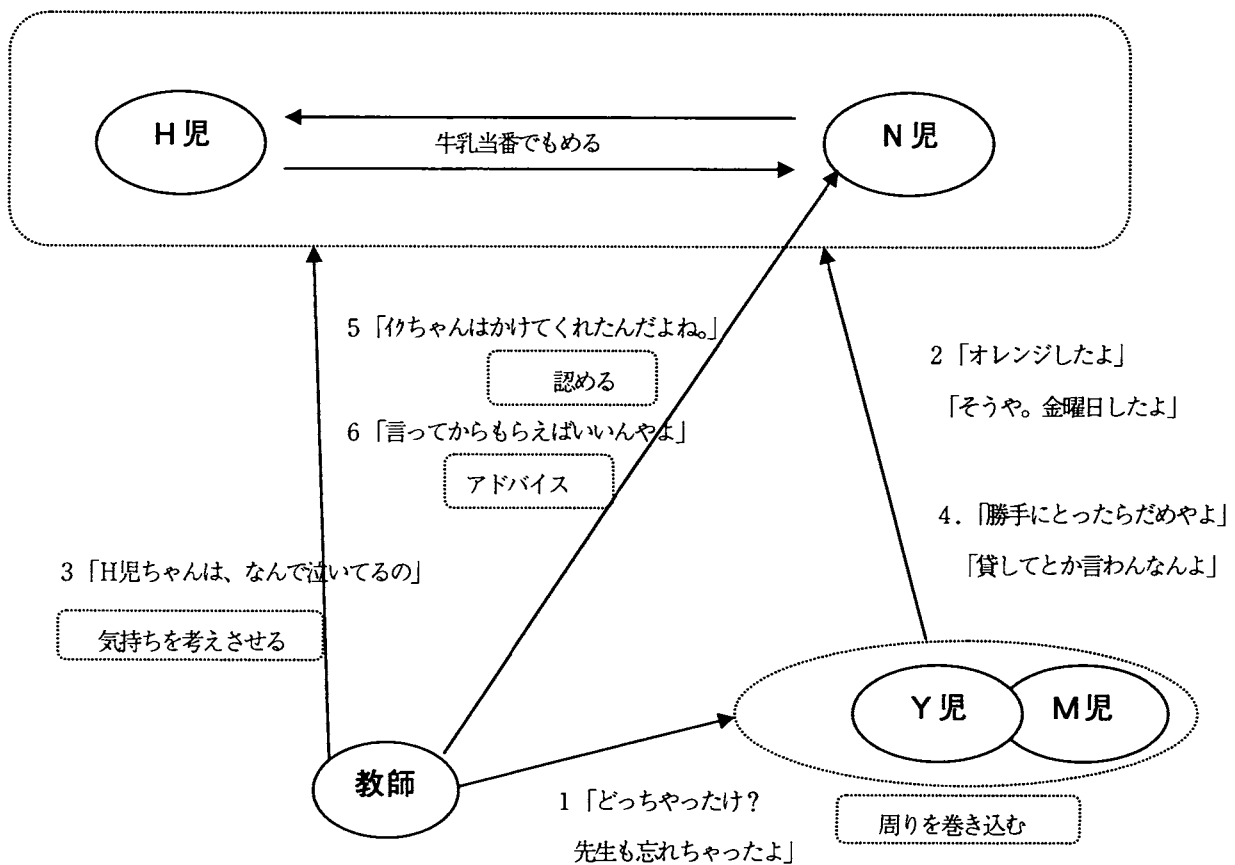
Y児 「N児ちゃんがとったからやと思うよ」  
 教師 「Y児くんはそう思うんだあ。H児ちゃん、星をとられたから泣いてるの？」  
 H児 「N児ちゃんが、何にも言わないでとっていったから……」  
 M児 「何にも言わんととったらだめやよ。貸してとか言わんなんよ」

M児にも言われたのがショックだったのか、N児は涙をぼろぼろこぼし始めた。

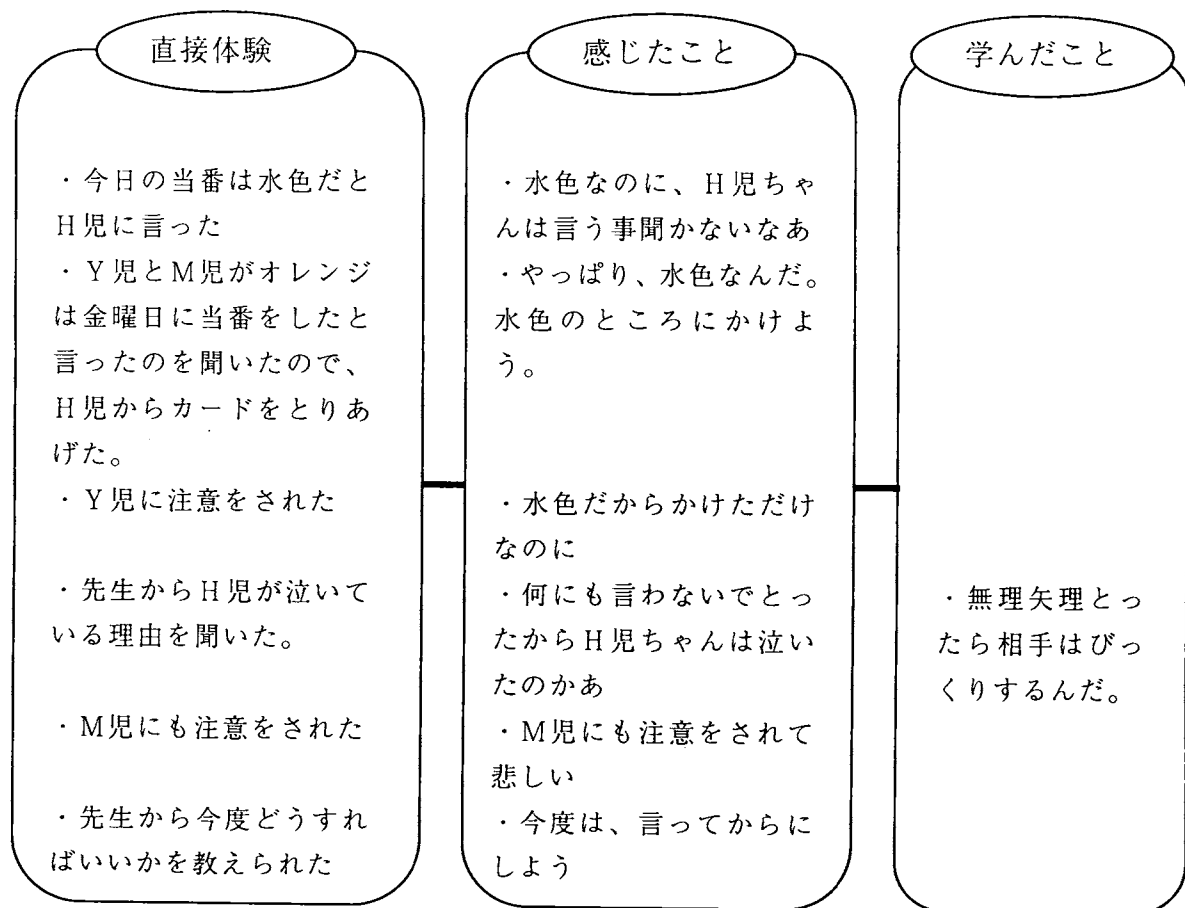
教師 「Nちゃんはよーく考えて水色グループにかけてくれたんだよね。  
 (N児頷く)  
 でもね、いきなりN児ちゃんがとっていったからH児ちゃんびっくりしたんだよ。今度はいきなりとらないで、言ってからもらえばいいんやよ。」  
 Y児 「そうや。今度気をつければいいんやよ」

教師はN児の頭をなでた。N児は泣きながら頷いた。

<かかわり>



○社会的側面の学びの様相



○N児の育ちについて

N児と今日の当番のカードをかけることをめぐってH児とトラブルになった。そのトラブルに対して、Y児やM児がN児とH児の双方の話を聞いて公平に言葉をかけた。二人が公平に接してくれたので、N児は冷静に考えるきっかけを得たようである。この事例の中ではN児は泣いてしまい、行動の変容が見られたわけではないが、H児の気持ちや周りの幼児らの考えを素直に受け止めようとしている姿はうかがわれた。

○環境の構成について

年長児の保育室には生活の見通しがもてるように一日の生活の流れをホワイトボードに表示している。それと同様に今日の牛乳当番もわかるように星のカードをかける場所がある。そのカードは誰もが操作できる場所にあり、誰が操作してもいい暗黙のルールになっている。そのカードは、幼児らが牛乳当番を心待ちにし、生活の見通しをもつ一助となっている。

○教師や友達のかかわりについて

N児は自分が正しいと思ったので、H児の気持ちに関係なくカードを取り上げてしまった。正しくても唐突な行動では相手を驚かせてしまい、うまくかかわることができないのがN児の課題であった。そこで、周囲の友達のを借りながら、事実の確認とH児へのかかわり方の評価をすることにした。Y児もM児も「オレンジグループは金曜日にした」と言い、N児の行動については、正しくてもいきなりとるのはよくないとアドバイスしている。この言葉によって、N児は自分の行動のよくなかったところに気づくことができたのではないかと考える。公平に判断してくれる友達は、N児が友達を信じて友達の思いを受け止められるようになるうえで、欠かせない存在だと思われる。

○今後に向けて

本事例では友達からのアドバイスを受けてよかったという学びにまでは結びつけられなかった。今後は、アドバイスを受けて友達とうまくかかわれてよかったという体験にまでつなげていきたい。

また、いつも教師が援助するばかりでなく、N児が遊びたいと思っている友達からの言葉でN児がヒントを得られるように、周りの幼児らにも思いが言えるように支えていきたい。

N児は友達の行動を見て唐突に行動をするところもあり、それが周りの幼児から受け入れられない原因になっているとも考えられる。自分の行動を振り返らせたり、よく考えて行動をしたことを認めたりする援助を心がけていきたい。

事例4 「一緒にリレー入ろ」

10月13日(金)

教師がドングリコーナーで遊んでいるときに、k児が困った顔で訴えにやってきた。

k児 「先生、N児ちゃんが無理矢理引っ張るの」

教師 「あら。どうしたんかね？」

k児 「N児ちゃんリレーに入りたいからって、私と一緒に入ろうっていの」

教師 「なるほど」

k児 「先生来て！N児ちゃん言っても聞かないの」

k児に手を引かれてN児のところに行った。N児はリレーをしている側で立っていた。

教師 「N児ちゃん、k児ちゃんがお話あるんだ」  
k児 「N児ちゃん、どうして私を無理矢理リレーに連れていくの？」  
N児 「・・・・・・・・」  
k児 「私はジュースをつくりたいの」  
N児 「だって・・・・・・・・」

珍しくN児は言い返さないので、教師から聞くことにした。

教師 「N児ちゃん、一人でリレーに入るのは入りにくかったんじゃないの」  
N児 「一人だったら入れないの」  
教師 「そういうときには、無理矢理引っ張らないで、お願いしてみたらどうかな」  
N児 「k児ちゃん、一緒にリレーに入ろ」  
k児 「・・・・・・・・でも、色水がいいの」

そう言って、k児は色水コーナーに行ってしまった。教師は残されたN児を膝に座らせて、しばらく様子を見ることにした。

教師 「残念やったね」

N児は涙を溜めながら頷いた。しばらくそうしていると、そこへ色水を持ったk児が通りかかった。

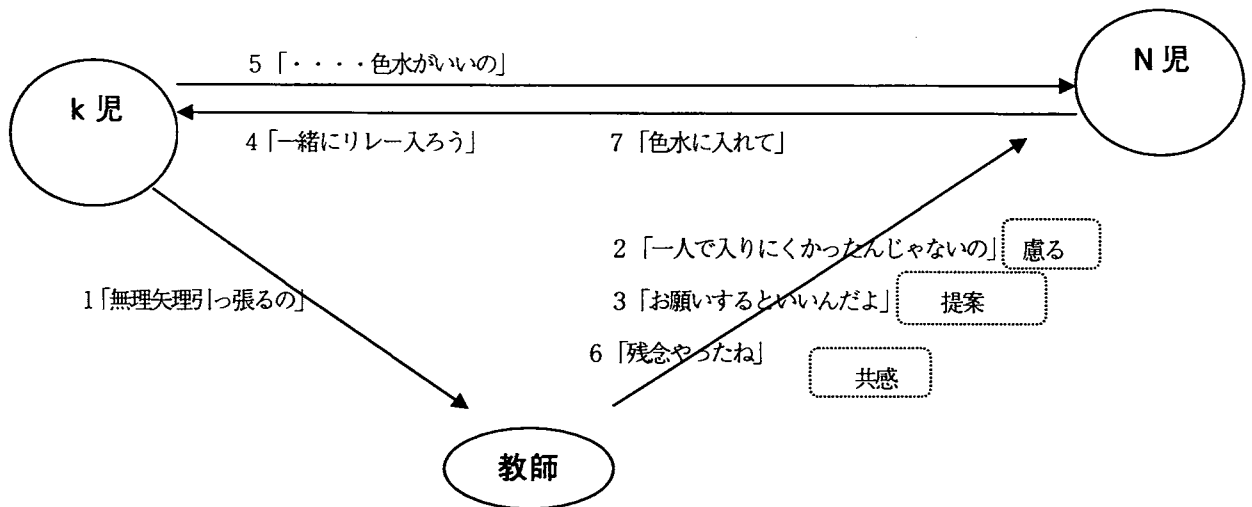
教師 「あら、おいしそうやね」  
k児 「オレンジジュースやよ」

それを聞いたN児は立ち上がってk児に声をかけた。

N児 「色水に入れて」  
k児 「いいよ」

N児はk児について行って、うれしそうに色水をつくり始めた。

<かかわり>



○社会的側面の学びの様相

直接体験	感じたこと	学んだこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ k 児にどうしてかと聞かれた</li> <li>・ k 児に「ジュースをつくりたい」と言われた</li> <li>・ 先生に「一人で入りにくかったんじゃないの」と聞かれた</li> <li>・ 先生に「お願いするといいいんだよ」と言われた</li> <li>・ k 児にお願いしてみた</li> <li>・ k 児に断られた</li> <li>・ 先生に抱っこされた</li> <li>・ k 児にお願いをしたら入れてもらった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ うまく言えないなあ</li> <li>・ どうしよう</li> <li>・ 一人では入りにくかったんだ</li> <li>・ お願いしたらうまくいくのかな</li> <li>・ きいてもらえるかな</li> <li>・ 先生が言ってもだめなんだな</li> <li>・ 残念だったなあ。誰も一緒に遊べない</li> <li>・ よかったあ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ k 児ちゃんにはしたい遊びがあるんだ</li> <li>・ k 児ちゃんと一緒に遊べてうれしい</li> </ul>

### ○N児の育ちについて

N児はこれまで、相手の思いを受け入れることができずに自分の思いだけをすぐに言い返し、友達とうまくかかわれないことがしばしばあった。しかし、本事例では、k児の「色水がしたい」という言葉を受け止め、考えたところにN児の変化が見られた。また、今までは友達がつくった遊びの場に強引に入ることがよくあったが、この日はk児の了解を得てから入ろうとしたところにも変化が見られた。

N児のこの日の遊びの前半には、忍者迷路でたまたま一緒になったk児と楽しく遊んでいた。もっとk児と楽しく遊びたいという願いが本事例でのN児の姿につながったのではないかと考える。

### ○環境の構成について

藤棚の下の忍者迷路は誰もが集い楽しく遊べる場所になっている。綱が何本も張られ、イメージを共有して遊びやすい場所である。そこで、N児はk児と共通のイメージで遊ぶことができ、友達と遊ぶ楽しさを感じたのだと思われる。そのことによって、N児にはk児ともっと遊びたい、もっと遊ぶにはどうしたらよいかを考えることができたと思われる。5歳児といえども、いつでも誰でも共通のイメージで遊べる環境は欠かせない。

### ○教師や友達のかかわりについて

日頃からN児は友達に対して強引なかかわり方が見られたので、N児自身に行動の強引さに気づかせたいと思った。また、気づかせるだけでなく、具体的に友達の誘い方をアドバイスした。N児がその誘い方を試すことで友達とかかわることができれば、自信にもつながると考えたからである。

しかし、N児の誘いは残念ながらk児には断られた。そこで、努力はしたがうまくいかなかったN児の残念な気持ちを受け止めようと思い、膝に座らせて一諸にしばらく時間を過ごすことにした。冷静に考える時間があったことが、気持ちの整理をつけるためによかったと思われる。

k児は言葉につまりながらもN児に自分がしたいことを伝えた。このことによって、相手には相手の思いがあることをN児は学んだのではないだろうか。だからこそ、N児と一緒に遊ぶためにはどうしたらよいかを考え、k児の思いを受け止めることができたと思われる。「一緒に遊んだ楽しい経験」は友達の思いを受け止められるようになるためには、欠くことができないと考えられる。

### ○今後に向けて

N児は友達へ目が向き始めたので、今度は今までとは異なる葛藤が生じるとと思われる。友達への関心が出てきたことを前向きにとらえて、N児を支えていきたい。また今回はk児がN児の気持ちを変えるきっかけになったと思われるので、今後も周囲の幼児の気持ちをN児に伝えるような場所を保障していきたい。

12月の誕生録音（誕生日のお祝いのために歌やインタビューを録音している）をした後のことである。幼児らはリラックスして近くに座っている友達と話をしていた。そのとき、M児やQ児の大きな声が聞こえてきた。

M児、Q児「N児ちゃん、だめやよ」

見るとN児がT児のエプロンを引っ張っている。周りにたしなめられてN児は引っ張るのをやめたが、今度は怒った表情で泣くのをこらえてしばらく沈黙になった。

教師 「どうしたの？」

Q児 「N児ちゃんがO児ちゃんとけんかになって、T児君のエプロン引っ張ったんだよ」

教師 「O児ちゃんとけんかになったんだ」

O児 「N児ちゃんがO児にばかって言った」

N児 「O児ちゃんもN児にばかって言ったよ！」

教師 「どうしてそんなことになっちゃたのかなあ」

Q児、M児、O児、T児、誰もどうしてN児が怒り出したのかがよくわからない様子だった。

教師 「みんなよくわからないんだねえ。」

N児は教師に促されて、泣き出しそうになりながらも答えた。

N児 「Z児ちゃんと話そうと思ったけど、Z児ちゃんはm児ちゃんとばかり話していて、しゃべれなかったし、T児君と話そうと思ったけど、O児ちゃんとばかり話していて、全然N児としゃべってくれなかった。それでばかって言ったの」

教師 「そうかあ、M児ちゃんやT児君とお話したかったのに、入れなかったんだ」

N児 「そう。N児にはH児ちゃんしか友達がいないの……」

それを聞いてQ児がびっくりしたように言った。



Q児 「ほし組もつき組もみんな友達だよ。小学校に行ったら友達100人になるんだよ。N児ちゃんにも友達たくさんいるよ」  
N児 「N児はお話をたくさんするお友達がほしいの」  
教師 「そうかあ」  
N児 「うん」  
教師 「お話をできるお友達が欲しいのになかなかできないんだね。  
……困ったねえ」

側でじっと聞いていたQ児が言った。

Q児 「何回も『入れて!』って言えばいいんじゃない？」  
N児 「言ってるけど、だめだもん」

N児はしょぼんとして自信がない表情である。

Q児 「……。やさしく言ったらいいんじゃない？」  
教師 「そうだねえ、いきなりだとびっくりするから、お話をよく聞いてから関係のあることを話してみたらどうかなあ」

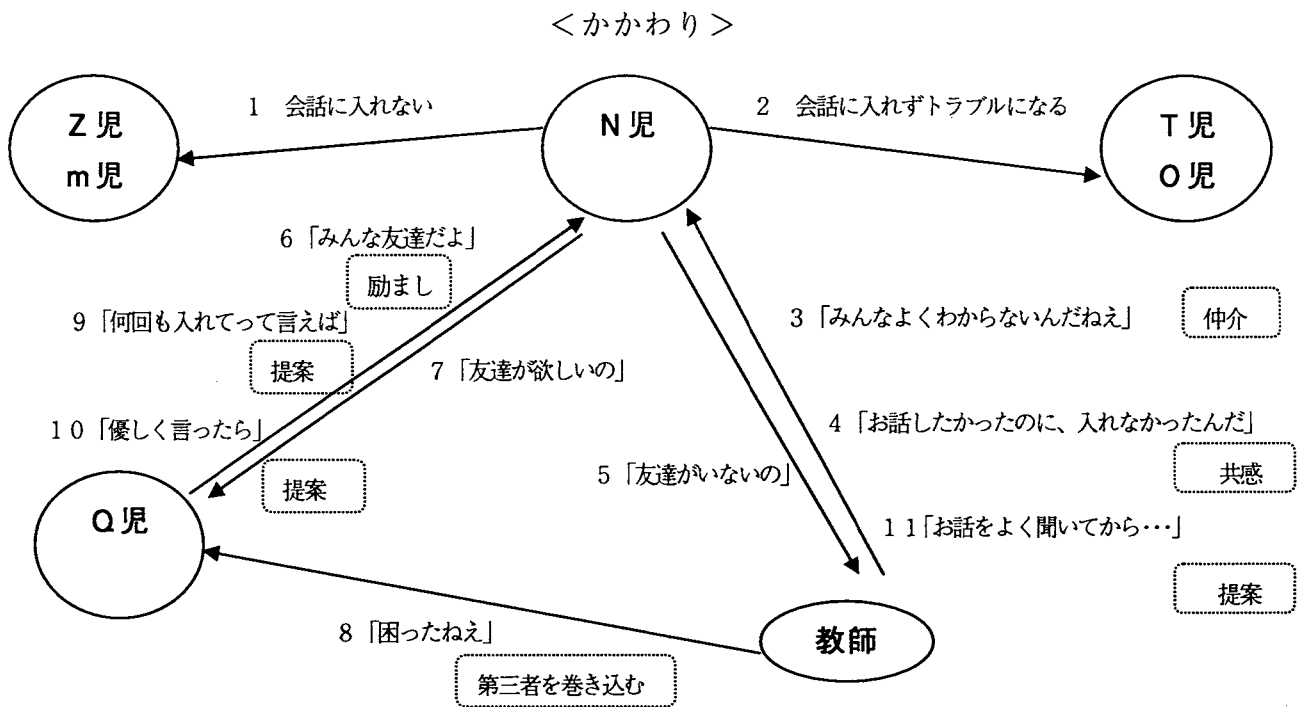
翌日、教師とM児がサンタクロースからのプレゼントの話をしている側で、N児は製作をしていた。いつもなら構わず入ってくるN児だが、その日はしばらく二人の会話を聞いて、遠慮気味に会話に入ってきた。

N児 「N児もサンタさんをお願いしたよ」

しばらく教師を交えて3人での会話が続き、話し終えた後、N児は製作に戻った。

教師 「N児ちゃん、やさしいお話のしかたやったね。お姉さんになったね。」

N児はほっとした表情で頷き、製作を続けた。



○社会的側面の学びの様相

直接体験	感じたこと	学んだこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Z児らにもT児らにも入れてもらえなかった</li> <li>・ O児とけんかになってT児を引っ張った</li> <li>・ Q児やM児にだめだと言われた</li> <li>・ 「H児ちゃんしか友達がいない」と言った</li> <li>・ Q児から「みんな友達だ」と言われた</li> <li>・ 先生とQ児から「やさしく、よく聞いてから言った方がいいよ」と言われた</li> <li>・ 先生とQ児の言った通りにやってみた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 誰も入れてくれなくて悲しいなあ</li> <li>・ 引っ張るのはだめだし、馬鹿っているのもよくないってわかっているけど</li> <li>・ 私にはH児ちゃんしか話せる友達がなくて悲しいの</li> <li>・ 私はみんなみたいにいつもお話するお友達が欲しいの</li> <li>・ よく聞いてから優しく言った方がいいんだな。今度やってみようかな</li> <li>・ 先生とQ児ちゃんの言った通りにやってみたらうまく話せた。よかったあ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ やっぱり私には話せる友達がいない</li> <li>・ 話をよく聞いて、やさしく言ったらお話ができるんだ</li> </ul>

### ○N児の育ちについて

N児はこれまで「自分が楽しい」、「自分がほめられてうれしい」というように自分が中心になる嬉しさや楽しさを感じていた。ここ数日、「N児には話せる友達がH児ちゃんしかいない」と訴えており、周囲の幼児らが友達同士で仲良く話している姿をうらやましく感じ、友達と一緒に楽しさを欲するようになってきたところに変化が見られた。

また、今までもトラブルがある度に教師は「乱暴な入り方では相手がびっくりするからよく見てよく聞いて入るように」声をかけてきたが、あまりN児は意識することがなかった。しかし、次の日に早速N児が意識をしてM児にかかわった姿から、N児自身に友達が欲しいという切実感があったことが伺われた。

### ○環境の構成について

誕生録音の際には、幼児らには自分で好きな場所に座らせている。そのことによって気の合う者同士が近くに座ることになり、N児は自分以外の幼児らが友達と仲良く話していることに気づく機会となった。いろいろな友達と知り合う機会や頑張っ自分の居場所をつくらなければいけない機会は、人間関係をつくる際には大切なことだと思われる。

### ○教師や友達のかかわりについて

N児が友達を求め、周囲の様子に気づいて悩んでいることをN児の成長ととらえた。そのため、本事例では、N児が悩み変わろうとしていることを他の幼児にも分かってほしいと思い、N児の悩みをQ児にも考えてもらうようにした。友達に対する考え方がQ児とN児のとらえがずれていたなので、ずれを確認しながら話を進めるようにした。

また、1学期から言い続けてきたことではあるが、友達を求めている今こそN児が受け止められるのではないかと思い、どうしたら友達と話がうまくできるかを提案した。次の日に、細心の注意を払い聞き耳を立てて会話を聞き取り、やさしく言葉をかけてくることができたのは、N児に切実感があったからだと思われる。

### ○今後に向けて

N児は、話ができる特定の友達が欲しいと願い、そのための努力もし始めている。今後は、N児が友達の中に自分の力で入り、一緒に遊ぶ楽しさを味わって、自信をもてるように援助していきたい。

今日の朝の集いの司会は、青グループ(N児、H児、G児、T児)である。司会は一人一人が言葉を言う約束になっている。誰から言うか順番をめぐってH児とN児で言い合いになった。

N児 「こっちからやよ」

H児 「いつもこっち(左)から言ってるよ」

間に挟まれたG児が控えめに声をかけた。

G児 「こっちから(H児の方から)だと思うよ・・・」

N児 「そんなこと決まってないよ」

H児 「でも、昨日の赤グループもこっちからやったよ」

N児 「赤グループは関係ないよ」

だんだん、N児の顔が怒った表情になり、H児に詰め寄った。H児は声を出さず泣き出した。前の方に座っていたQ児、k児、J児が3人で顔を見合わせながらあきれた表情で二人に聞こえるような声で言った。

k児 「けんかしなくてもね」

Q児 「泣くほどのことでもないよねえ」

J児 「うん。けんかをしなくても決められるのに・・・」

3人の声を聞いて、H児は泣き止もうと涙をふいた。N児もそれ以上、H児に言うのはやめてH児の側で立っていた。待ちきれなくなったs児が時計を見ながら口をはさんだ。

s児 「遊ぶ時間短くなる・・・」

Y児 「そうや。早く決めて」

二人の言葉を聞いたN児は、はじめの場所に戻ってH児に向かって言った。

N児 「H児ちゃんからでいいよ。次はG児くん、その次N児ね。その次H児ちゃん、G児くん、最後N児ね。」

順番の確認をして、ようやく朝の集いが始まった。途中で登園が遅れていたT児が入ってきた。最後の言葉をN児が言おうとしたとき、k児がT児の存在に気付いて言った。

k児 「T君、言ってないし、T君が言ったら」

N児は、自分の言葉なのにと一瞬無然とした表情になったが、すぐに

N児 「T君、言ってもいいよ」

とT児に向かって言った。T児の言葉を最後に朝の集いはようやく終わった。みんなが動き始めたときに、教師はH児の近くにいる幼児らに声をかけた。

教師 「ねえ、N児ちゃんお友達のお話を聞いてよく考えて我慢したと思わない？」

Q児らやk児が頷いた。

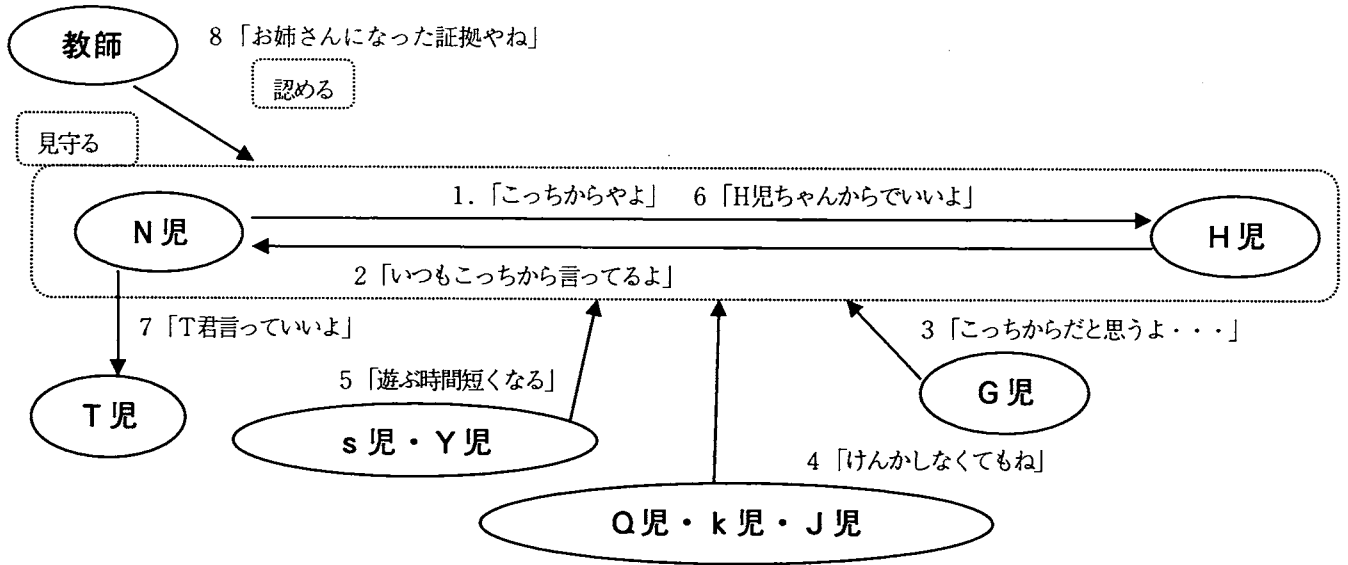
教師 「みんなのこと考えられるようになったのは、心がお姉さんになった証拠やね。」

N児は嬉しそうな表情になった。

N児 「H児ちゃん、一緒に遊ぼう」

そう言って、H児を誘って製作コーナーに行った。

<かかわり>



○社会的側面の学びの様相

直接体験	感じたこと	学んだこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 当番の順番をめぐってH児と言い争いになった</li> <li>・ G児に反対された</li> <li>・ G児とH児の言う事に反対した</li> <li>・ H児が泣き出したのを見た</li> <li>・ k児、J児、Q児からけんかをしなくてもいいのではないかとわかれた</li> <li>・ s児から遊ぶ時間がなくなるとわかれた</li> <li>・ 最初の言葉をH児に譲った。</li> <li>・ T児にも自分の言葉を譲った。</li> <li>・ 先生や友達に認められた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私から言いたいのに</li> <li>・ G児くんはH児ちゃんの味方をしていやだなあ</li> <li>・ 青グループでは決めてないのに</li> <li>・ H児ちゃんはすぐ泣くなあ</li> <li>・ けんかをしなくてもいいかもしれない</li> <li>・ ほし組のお友達が困っているんだ</li> <li>・ みんな早く遊びたいんだな</li> <li>・ みんなも困っているから最初に言うのを譲ろう</li> <li>・ k児ちゃんが言うように、T児くんは1回も言っていないから、譲ろう。</li> <li>・ 譲ったら先生からもほめられた。うれしいな</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分たちが順番を考えているんだけど、時間がかかるとみんなに迷惑がかかる</li> <li>・ 朝の集いが進むように順番を譲る</li> <li>・ 譲ってほめられるとうれしい</li> </ul>

### ○N児の育ちについて

N児は2学期の終わり頃から、話ができる友達が欲しいと願うようになった。友達をつくるには、友達の話を聞かなくてはいけないことも教師から言われていた。この事例では、k児やQ児らからけんかをするほどのことではないことや、s児からは遊ぶ時間が短くなるというようなことを言われた。今までならば、そんな友達の声にはおかまいなしに自分の正しさを主張し続けていたかもしれない。

しかし、この事例では素直に友達の言葉を聞き、H児に譲ろうとした。この姿からクラスみんなが気持ちよく過ごすために、周りの友達の言葉を受け入れようとしているN児の育ちが伺われる。

### ○環境の構成について

年長組では4月から登園後すぐに、朝の集いを行っている。これは毎日みんなの前で繰り返されるので、幼児らにとっては、判断しやすく、友達の様子を見て学ぶお立ち台効果がある。そのため、本事例でもN児のグループの進め方について、様々なつぶやきが出てきたと思われる。

また、1学期は当番全員で声をそろえて司会をしていたが、2学期半ばからは言葉も増やし、一人ずつ言うことにした。一人ずつ言うことで順番を決める必要性が生まれた。ほかのグループでは並んだ順番で自然に順番も決めているので、トラブルにはならないが、N児やH児にとっては、順番は重要で、きちんと決めてからでないと安心して始められないようだった。しかし、朝の集いはみんなの時間であり、自分達の勝手に時間をかけてはみんなの大事な遊びの時間がなくなることに気づくことができたようである。

### ○教師や友達のかかわりについて

今まで、N児の友達へのよくないかかわりには、教師が直接的に働きかけることが多かった。しかし、朝の集いはクラスみんなの時間だったので、友達からの声が出てくるように教師はできるだけ見守ることにした。

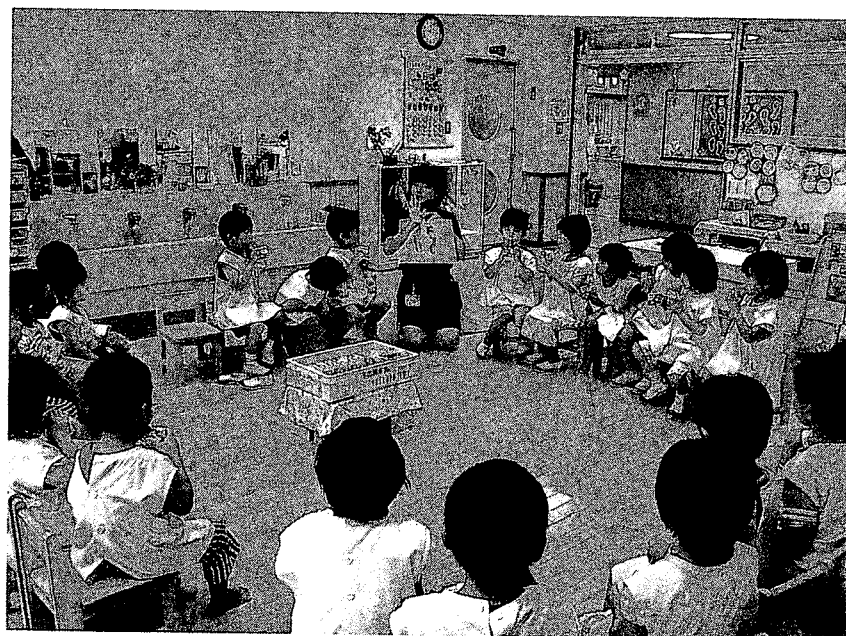
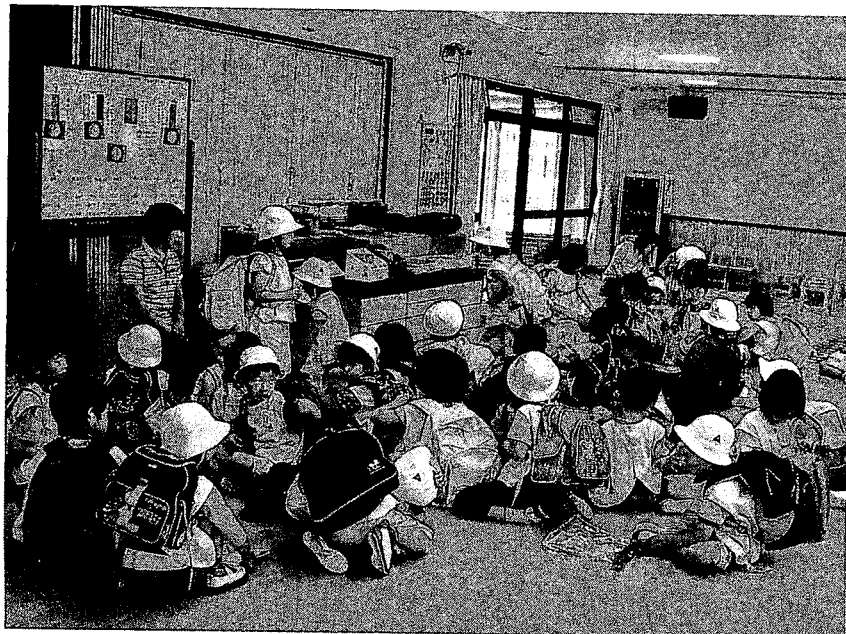
k児やQ児らは普段からN児のことを気にかけてくれているので、N児はk児らの言葉を素直に受け入れようとしたようである。また、s児が時間のことを言ったので、早く遊びたい友達の気持ちにも気づくことができ、H児に言葉を譲ることができたと思われる。H児に順番を譲ったことでスムーズに朝の集いが進み、さらに気持ちよくなったので、k児の「T君が言ったら」の提案に対しても、自分から「言ってもいいよ」と言うことができたと思われる。

### ○今後に向けて

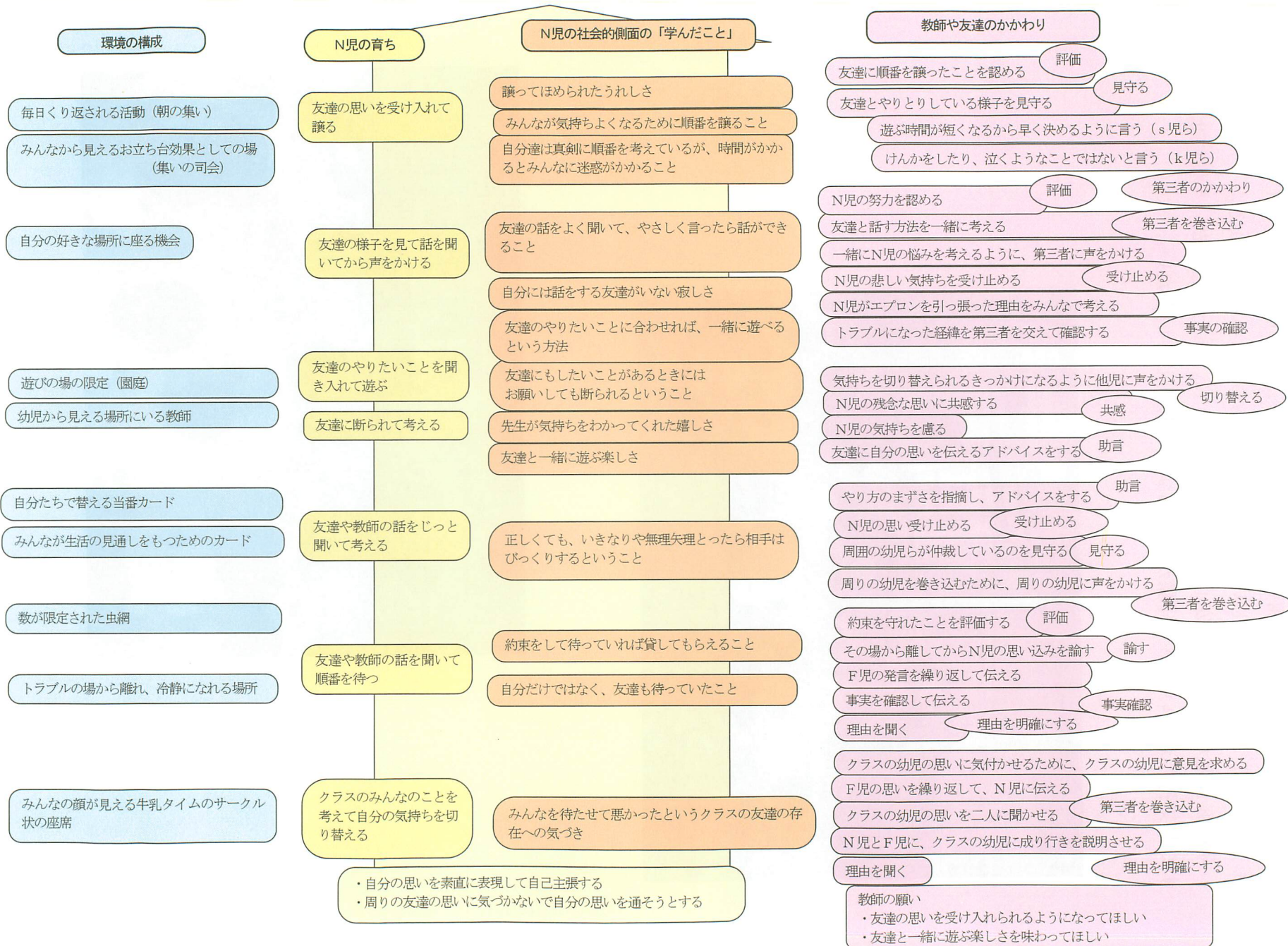
N児は3学期に入りクラス集団の場において、友達の思いを受け入れて行動しようとするようになった。しかし、まだまだその他の場面では自分の場所をめぐって主張し続

ける姿も見られる。その裏側には自分の居場所をはっきりさせて安心したい、自分が頑張っていることを認めてほしいという気持ちがあったように思われる。

今後もN児が集団の中で安心して過ごせるように、また友達の思いを受け止めて生活すると気持ちがよいという経験ができるように援助していきたい。







## 〈一年を振り返って〉

### (1) N児の社会的側面の「学んだこと」と育ちについて

N児は4月当初、自分の行動を棚上げにして、相手の行動を責める姿がよく見られた。自分の言動を客観的にとらえることができていないようだった。そこで、トラブルになったときには、事実や状況を丁寧に確認して、N児自身に自分の行動を冷静に見つめさせるようにしてきた。さらにその行動はどうだったか、もっと他の方法はなかったのかを考えさせるようにしてきた。その結果N児は、自分の行動を振り返って、友達にかかわる方法をN児なりに工夫するようになってきた。友達の様子を見てから話しかけようとしたり、楽しく友達と園生活を過ごすために順番を譲ったりした姿にN児の学びが伺われる。

また、相手の思いには気づかないためにトラブルになることもしばしばあった。そんなときには、周りで見えていた第三者の幼児の見方を知らせたり、状況を確認していく際に、相手の思いも考えさせたり、伝えたりしてきた。相手の幼児の言葉が足りない時にはN児に思いが伝わるように言葉を補ってきた。その結果、相手にもやりたいことがあることや、相手も譲ったり、順番を待ったりしながら気持ちよく過ごすために努力をしていることなど、友達にはそれぞれの思いがあることを学んできた。そして、相手の思いを受け入れて行動しようとする姿が見られるようになってきた。

さらに、N児は友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じることで、もっと仲良くなりたいと願うようになってきた。友達が仲良く話しているのを見て、「話をする友達がいない寂しさ」を感じ、その寂しさを感じたからこそ、心の通じる友達が欲しいと願い、教師や友達からのアドバイスを素直に受け入れるようになってきた。

### (2) N児の学びを支える環境の構成と教師や友達のかかわり

#### ○環境の構成について

5歳児になるとその子なりに周りの様子が見えてくる。友達の様子を見ながら、様々な価値判断をしていくようになる。その価値判断をもとにして、自分の行動を振り返り、自分の行動を見直そうとする姿が見られるようになってくる。そこで、5歳児ではお互いを意識し合える集団活動の場を意図的に設定している。その場として以下の3つの場が効果的であると考えられた。

・ 友達の思いに気づくことができるサークル状の座席・・・牛乳タイムのときには、ほぼ3ヶ月間、同じ場所に座っている。その間に、隣に座っている子だけでなく、向かい側に座っている子などたくさんの友達の存在に気づくことができる。事例1では、N児を待っているクラスの友達の存在に気づくことができた。サークル状の座席は、互いの顔が見えるので、友達の存在や思いに気づかせる場としては効果的な環境である。

・ 互いを客観的に評価できる朝の集い（ルーティンの活動）・・・一日の見通しをもって、主体的に生活をつくりあげていくために、毎日、朝の集いを行っている。朝の

集いでは3, 4人のグループで順番に司会を行っている。毎日くり返される集いは、幼児にとってわかりやすく、価値判断が容易で友達同士でアドバイスをしやすい場となっている。また、鏡効果として自分を客観的に捉えることができる。N児のように自分を客観的にとらえるのが苦手な幼児にとっても、友達からのアドバイスや思いを素直に受け入れるうえで、大きな役割を果たすようである。

#### ○教師や友達のかかわりについて

N児は、友達同士の暗黙の了解に気づくことが苦手で、自分が正しいと思うことは、相手の気持ちや周囲の状況に構わずに主張することが多かった。

・そんなN児には「友達の様子を見てから入る」、「いきなり入らず待つ」等、友達にかかわる際の具体的な方法を援助することが必要だと思われた。しかしN児には、自分のかかわり方が唐突であるという自覚があまりないようだった。そこで、周囲の友達と一緒になぜそうなったのか事実を確認し、N児に自分の行動を自覚させるようにしてきた。自分の行動を客観的にとらえることが苦手な幼児には、**第三者とともに、状況を整理するかかわりは欠かせない。**

・N児は相手の思いに気づくことが苦手だったので、相手の幼児の気持ちを代弁したり言葉を補ったりしながら、相手にも思いがあってやっていることだということを知らせるようにしてきた。その際には、N児が安心しなければ相手の思いには気づくことができないと考え、まずN児の思いを受け止めるようにしてきた。相手の行動だけを見て判断しがちな幼児には、本人の気持ちを受け止めながら、**丁寧に相手の思いを伝えていくことが必要である。**

・N児にとっては、N児の気持ちをくみとって接する友達のかかわりの影響は大きかった。友達をつくる方法をアドバイスされたり、そんなにこだわることはないと言われたりしたことを、N児は素直に受け入れることができた。**友達同士のかかわりによって幼児を支えていくことの重要性を改めて感じた。**一人一人を育てるためには、クラスの集団を育てていくことも大切なことである。